

## 第2回宮代町公共施設マネジメント会議議事録

### 1 開催日時

令和3年10月18日（月） 午後2時00分～午後4時05分

### 2 開催場所

役場2階204会議室

### 3 出席者

佐々木誠委員長、難波悠副委員長、唐松奈津子委員、佐藤恵祐委員、力石琢磨委員

（事務局）企画財政課

栗原課長、伊東副課長、小川主幹、大越主査、山下主事

### 4 次第

- 1 開会
- 2 第1回会議のおさらい
- 3 現地視察を振り返って
- 4 今後の検討の方向性について
- 5 ワークショップについて
- 6 その他

### 5 議事(要旨)

#### (1) 第1回会議のおさらい

第1回会議のおさらいについて、事務局より資料に基づき説明を行った。

#### (2) 現地視察の振り返り

現地視察の振り返りについて、各委員が意見を発表した。

#### 【各委員から現地視察を振り返っての意見発表】

佐々木委員長 学校以外の施設をメインに検討するということが、学校は大きな存在なので触れずに過ごす訳にはいかない。学校は他施設と比べ規模が大きく、生徒の増減もある。10年前は、どんどん生徒が減っていきだろというストーリーだったが、道佛の住宅地区もあり、増えている。第一次の計画にあるように空間の柔軟な転用は、より積極的に考えていくべきではないかと思った。その中で、新築するのか、既存のものを使うのかは、町の財政状況と関係してくる。既存の建物であっても、セキュリティの問題はあるが、笠原小学校は他の機能が入っていても問題なく使えている。心配したらきりがないので、実験を繰り返していくことが重要だと思う。あとは、小中一貫校は、学校再編の中で当然のように出てくるアイデアだと思う。宮代町ができるかどうかという問題はあるが、一応キーワードとして挙げておく必要はあると思う。文化施設全般のことをいうと、公民館は廃止でよいのではないかと。学校に上手く機能を移せば立地上も問題なく、今の公民館は無人だが、学校であれば人もいる。あとは、宮代町は集会所も非常に多いので、そこを上手く兼用してい

く。学校以外の施設をメインに検討するという話であれば、公民館的機能のところは議論の一つになると思う。あと、はらっパーク、総合運動公園というのは、町の端にあるので、他の自治体に近く共有しているので、広域連携するとか、使う人が町民のごく一部とするなら、受益者負担として利用料を上げるなど。新しい村は、宮代町の象徴的な施設であり、活動だと思っているので、無印良品ができたこの機会に、民間企業との連携の在り方や指定管理の在り方などを市民参加で議論する必要があるのかなと思う。

難波委員

イメージ的に、町の中心部に集めるのがよいと思っていたものの、仮に小学校を3校残すと考えたとき、須賀小・中は、先ほど小中一貫校という話もあったが、そのまま使った方が余程合理的なのではないか。中心部に集めようと思っても、交通面のアクセスはよいが、施設面で本当に許容できるのか、ということに疑問を感じた。コミュニティ施設的なもの、集会所や公民館は、機能を考えたときに、本当に地域に提供しなければいけない価値は何かを考えなければならない。今まではサークル活動や地域の人が集会所として使うという話で、そういうところだけフォーカスしてしまうと、中高生の居場所など、目的のない人のために開かれた施設に現状はなっていない。それを学校に移したとしても、学校もセキュリティの問題でどこまで開けるのかという課題があると思う。コミュニティ施設と言ったときに、施設が持っている機能とコミュニティに提供したい機能というものがミスマッチなのではないかと感じている。全体を通じて、とても費用が掛かっている施設と、そうでない施設との二極化が激しい。宮代町の図書館は、この人口規模の町としては非常に充実していて、素晴らしいけれども、杉戸町や白岡市に図書館が出来てから使用者が減っているし、貸出数も減っている。かといって、年間8,000万円ほどかかっている、かなりコストがかかっている。もう少しそのポテンシャルを生かすのか。ぐるるやはらっパーク、進修館もそうだが、お金がかかっている施設について、利用者を増やすのか、稼ぐ道を見つけるのか、お金をかからなくするのか、そこを考えなければならないと思った。

佐藤委員

教育施設全般のことからいうと、小中学校の適正配置の審議会から出ている答申自体は、将来的には考えていく必要があるのかなど。個別の内容については、例えば、学校のプールは、小学校はぐるるの温水プールを活用して、まとめて授業をする。中学校にはプールは欲しいというのはある。公共施設マネジメントでは、学校には触れないという話だが、コミュニティスクールということで東小学校と須賀中学校が指定されていて、いずれは全校がコミュニティスクールという形になると思うので、学校とコミュニティの核というのは離せないというか、連携していかなくてはならないと感じている。福祉施設については、六花は、老人保健の施設があるが、民間の福祉事業所がある程度増えてきた中で、町がどこまでやるべきなのかなど。いずれ施設の改修が必要になってくる保健センターは、福祉と医療の連携で六花と同じ場所にあった方が良いのではないかと。あとは、子育て支援センターや子育て広場はあるが、児童館がない。小中高生を対象にした施設がない。施設はある程度お金もかかっている充実しているというのがあるが、住民の立場からすると、過剰に施設があるというイメージもないし、足りていないという感じでもない。文化施設については、公民館は貸館のような形になっており、集会所と大差ない。越谷市や久喜市は地区公民館・コミュニティセンターとして一緒の名称になっている。もはや公民館事業とコミュニティ事業は区別もつかないので、そういう形で地区の核ごとに、3つの駅ごとに、そういう機能を持たせる。理想とすれば学校施設あたりが中心になるのがよい

だろうが、そこまではなかなかできない。ただ、視点としてはそういうのが必要かと。あとは自由意見として、郷土資料館は色々事業をやっているが、借地だった駐車場を返したので入り口すら分からない。やっていることや資料は面白いので、図書館や新しい村などと農のみちでつながっているのもっとリンクしながら活用していくというアイデアがある。宮代町は、以前はコミュニティ協議会があったが、今はない。コミュニティ協議会がない町というのは、たぶんこの辺ではあまりないと思うが、地縁血縁みたいな関係というのは、あまり望まなくて、何かやりたいとか、目的のあるコミュニティだったら成り立つのかなと。コミュニティを考えていくのはなかなか難しいと感じた。

佐々木委員長 話の中にあつた、コミュニティスクールとは何か。

佐藤委員 コミュニティスクールとは、地域の人と連携し、学校運営を地域の人で運営しているというもの。それに対して国が補助金を出している。学校だけに任せず地域も関わって学校教育していきましょうというものと理解している。

力石委員 教育施設については、東小と笠原小を除くと、生徒の減少が顕在化して空き教室もそれなりにある。コミュニティスクール機能も一部認定されて実施しているというのもあるので、公民館の機能集約の候補は、小中学校の空き教室が中心になってくるのではないかと感じた。東小、笠原小は、木造校舎、特色がある建物、風景との調和というのが、地域資源になるのではないかと。学校は聖域と言いつつ、小中一貫校など特色あるものも検討課題とすべきではないかと思う。福祉施設について、六花は機能集約化されているが、保健センターとの連携・複合化が課題としてある。文化施設は、特に西口から進修館、図書館から田園風景を見ながら新しい村、そして農のみちがあつて郷土資料館、旧進修館と、かなりポテンシャルがあるので、民間活力も入れながら、ここを繋ぐようなものを検討課題にするのがよいのではないかと感じた。公民館については、機能軸ということも含めて抜本的に見直す感じ。自身の会社で、新しい村から進修館までを農のみちで繋ぐような取組みを検討してはどうかというものと、調整区域内外を踏まえて公民館機能集約についてまとめたものを作ったので、後の議論の中でも参考にしてもらえればと思う。

唐松委員 学校については、空き教室を公民館機能やコミュニティセンター機能に移管できないかと。笠原小、東小は児童数が減少した時の想定もして、フレキシブルな対応が可能な造りで検討していくべき。進修館やはらっパークなど、費用がかかっているものは、収益化。お金がかかっている割に、そこで十分な収益が上がっているように見えないと感じたので、先行事例も含めて活用方法は様々あるので、指定管理化の検討や独自収益の工夫などを促進できないのか疑問に感じた。コミセン機能やコミュニティ施設は、今後の議題になる。公共施設を考えていくうえで一つポイントになると思うが、実際に何を設けていくのか、具体的な機能を検討していくのが柱になるのではないかと。あと、派生になるが、一括予約管理システム。施設を拝見し、平日の昼間というものもあると思うが、高齢者の活用は見えるが、若い世代や事業者の利用が見えなかったもので、より若い人たちに使ってもらえるような、開かれた施設の検討、活用がしやすい仕組みの検討を導入していくことは必須かなと感じた。

以上

### (3) 今後の検討の方向性及びワークショップについて

今後の検討の方向性及びワークショップについて、事務局より資料に基づき説明を行ったところ、以下のような意見があった。

#### 【事務局から今後の検討の方向性及びワークショップについての説明】

佐々木委員長　それでは、今後の検討の方向性について、資料を基に4つに分けて、ここに当てはまらないものもあると思うので、5つぐらいのテーマで進めていこうと思う。まずは、「コミュニティの場のあり方」について議論したいと思う。

佐藤委員　コミュニティの場のあり方というのは、大事なことだと思う。新井町長も進めていこうとしているもの。ただ、コミュニティの活性化と言った場合、どのような状態が活性している状態なのか分からない。今の状態でもそんなに困っていない。逆に、今まで色々やっていた、そこが活性化しているという状態なのかどうか。単なる地縁血縁みたいな、同じ地域に住んでいるから同じコミュニティで仲良くしましょうという時代ではないのかなと。そうした時に、コミュニティを持つ必要というのは何かと思った時、一番わかりやすいのは防災関係かと思った。有事の時にコミュニティの力、必要性が出てくる。防災のような目的があり、そのためにこのコミュニティが必要というものではないかと漠然と思った。

佐々木委員長　ご近所づきあいというようなイメージではなく、それを煩わしいと感じている人もいる中で、つかず離れずの関係みたいなものが今の時代に合っているのだとすれば、何がきっかけかという防災。非常に分かりやすい。

難波委員　目的がない人が行ける場所、カフェにお茶飲みに行くということかもしれないが、今の集会所と公民館にはそういう懐の深さがない。目的がないといけない場所になっている。これから後期高齢者の割合が上がっていく、そうすると、地域で孤立をする人たちというのが増えてくる。その人たちの対策みたいなことを一つ考えなくてはいけないのではないかな。その人たちが、何となく近くにある場所で、何となく用が済ませられたり、役所に行かなくても証明書が取れたりとかも含めて、何となくちょっと顔見知りになって少し話ができるというような場である必要があるのかなと。現地視察をして思ったのが、町の西側、給食センターの方も含めて、薄い。調整区域がほとんど。施設が全然ない地域なので、その辺りをどういう風にしていくのか。バスも東側をメインに走っている状態になっているので、もう少し東西の軸を増やすのか、西側に何か活動を考えるのかを視点としては考えなくてはいけないなど。

佐々木委員長　市街化調整区域に広がっていったらどうしていくか。難しい。

難波委員　多分、そういう所の方が高齢化率は高くなる。今は団地部分の方が深刻だとは思いますが、離れていくと、孤立している人たちをどう救っていくかというところは重要になるのかなと。現地視察の後に気になって人口構造を調べてみたら、宮代町はなぜかこの5年間で、20代前半が増えている。十数年前に調査をしたときには一番減っていた世代。宮代は、日

工大があるので10代後半が少しだけ増えて、就職して出ていくというのがあり、20代後半にもっと出ていき、30代は減らなくなる。それ以降はあまり減らなくなるという感じだった。今は、30代は道佛の区画整理で増えている。子どもたちも増えているが、なぜか20代前半が増えている。大学卒業したぐらいの年齢。この辺のミニ開発で増えたのかもしれないが、そういう人がもしかしたらこれから地域を担ってってくれる人になる可能性が、希望があるんじゃないかと、勝手に見出した。あと、道佛の区画整理で子どもが増えている。その人たちが10年後高校生になる。その子たちが、町を出ていなくてもよいと思える場を作るとするのが大事なのではないかと。それが全てコミュニティで受け止める必要はないが。

佐々木委員長 目的がない人が行ける場所というのは、サードプレイスと言うこと。中高生の話も出だし、高齢者、特に後期高齢者の孤立化を防ぐのも大事。あとは、西側をどうするか。市街化調整区域だし、宮代町はコンパクトシティというのが売りなので、それをどうするのか。その中で公共交通が結構軸なのかもしれない。

事務局 ワクチン接種で高齢者がスマホを使えないという騒動があった。日工大にも手伝ってもらって、役場でサポートをしたが、隣近所でこうやってやるんだよと言える人がいて、聞ければ。ほとんどの人がそうやっているのだろうが、実感した。

唐松委員 やりたいことがある人をサポート、後押しできる場所が必要かと思う。コミュニティ、人と人との繋がりということだと思うが、それぞれのチームに必要なサポートは多分違う。小さな子供たちとママ、その子供たちが大きくなって小中高生になってということと、働き手になったときの働く場とか、民間事業としてやられる方々とか、高齢者とか、それぞれのライフステージに必要なものは違うが、それぞれでやりたいものもあって、それをサポートするものがあるとよいと思った。今は感じられない気がしている。

佐々木委員長 具体的には、どういう感じのものか。

唐松委員 総合計画で小商いと出てくるが、そういうことをやりたいと思った時に、身近に一緒にやろうと言える仲間と出会える場だったり、行政も後押ししますというのを気軽に相談に乗れる場だったりとか。ボランティアしたいな、町が好きだなと思っている小中高生がみんなで行こうとなった時にどこかできる場であったり。あとは、単純に目的がないときは居場所でよいと思うが、やりたいなとか、一人でやったら寂しいなと思った時に、身近にサポートできる人たちと出会える場が必要だと思った。

佐々木委員長 行政はそれなりに整備をしてくれているのだろうが。なくはないけど、それをどうするか。

唐松委員 自発的に地域で行っていけるのが理想と思っている。行政に頼るのではなく。拠点になっていくと何となくよさそうと思う。

佐々木委員長 そういう拠点が実は身近にあって、杉戸町でやっている「ひとつ屋根の下」という取り組み。月3万円ビジネスをやっている「ちょいなか」の矢口さんという方が、宮代町と杉戸

町で連携して月3万円ビジネス講座、いわゆる小商いの講座をしている。子育て中の母親がメインターゲット。その人たちが集まって、出会える場が実はある。すぐ隣なので連携すればよいのではないかと思う。しかも、民間が主導でやっている。まさにイメージが近い。

力石委員 宮代はコンパクトな町なので、多世代交流というのがコミュニティのキーワードになってもよいのではないかと思う。唐松委員の意見と似通っているが、高齢化がこれからどんどん進む中で、多世代交流をすることで見守りやICTのサポートになる。あと、20代前半が増えているということで、理由は調べないといけないかもしれないが、ここから都心に通うサラリーマンなのかもしれない。学生が空き家とかで小商いをやるというのも増えてきていると聞いたので、そういうビジネスを後押しするようなインキュベーション機能とか。学生たちの仲間が集まって、経験豊富なベテランシニアがメンター的にアドバイスするとかそういうコミュニティの場ができるととても魅力的な町になると思う。そういう要素があってもよい。

難波委員 町の用務員さんのような人が公民館にいて、若者がそこでビジネスをやれて、必要な手助けをしてあげて100円をもらうみたいな。

力石委員 そう。シニアの方はそれを生きがいみたいにして、そういう好循環。

唐松委員 視察をしていた時、施設が閉じられた印象があった。フラッと行ってゆったりするみたいな、その開放感が色々なところで出てくるとよいと思った。

事務局 確かに、知らない人は行きづらい。

佐々木委員長 公民館は、絶対に入れない。

佐藤委員 目的がないまま行ったら、不審者みたいになってしまう。月3万円ビジネスとか、そういう組織は興味がある人が集まっていると思うが、それも一応コミュニティになるのか。仲間が集まってやるというのもコミュニティとして捉えれば、進修館とか目的別に集まってくる。そういうのもコミュニティと呼んでよいのか分からない。先ほど言った防災というのは、地区コミュニティ。歩いて行けるぐらいの所でフラッと寄れる。そういう所でちょっとしたイベントとか事業をやっていれば、確かに行きやすい。和戸や姫宮ぐらいでも。

佐々木委員長 そういう意味では、防災はとても目的がはっきりしているコミュニティなのだろう。もう一つの、サポートするコミュニティの場も目的がはっきりしている。目的がはっきりしてくると、コミュニティとは違う次元になってくる。NPOの活動など、そういう位置づけで。コミュニティとは何なのかと、いくつかに分けられるのかもしれない。それぞれの仕分けに対してどうしていくのかという整理は必要かと思う。

次の「機能重複施設の統合」については、プールの統廃合、保健センターの六花への移転、公民館の廃止とか、機能の棚卸しをした中で減らせるものは減らしていこうというような視点。これに関して、意見はいかがか。

- 佐藤委員           あえて言うなら、学校のプール。小学校は昨年今年と全然プールを使っていない。使っていないと草が繁茂している。それなら、ぐるるや民間のプールに、バスの費用がかかったとしても半日まとめて集中授業する方が子どもたちにとってもよいのかと思う。
- 事務局             昔の学校は、体育館とプールがあることが学校近代化の証のように、昭和 50 年代に盛んに作っていた。
- 佐藤委員           個人的には各学校にプールは欲しいが。中学校ぐらいにはあればよいかなと思う。
- 佐々木委員         この論点は、先ほど参考資料で配布された公共施設マネジメントの総括の主に財政運営の視点というところに関わってくるので、ここでどこまで突っ込むべきかというのもある。他の公共施設マネジメントという、床面積の総量 20%を減らすとしていたりするので、ここは大胆にいった方がよい気もする。出てきたアイデアを整理するだけでよいのか。他のアイデアとセットにして強い方向性を示すとかがあってもよいとは思う。
- 難波委員           プールに関しては賛否両論ある。最近、小中学校のプールをやめて民間や市営のプールを使うのが流行りではあるが、実際にお金の面でどれだけ節約になるかということ、実はならないというのが大半。よっぽどプールが老朽化して水漏れがあってというような話なら別だが。宮代の場合はぐるるのボイラーをどうするのか、もしかしたらそっちの方がお金がかかるかもしれないという問題も出てくる。
- 佐藤委員           水物の施設は使わないとすぐダメになってしまうイメージがある。
- 佐々木委員長       難波委員が言ったように、どれだけ費用対効果があるのかという検証をどこまでするのか。
- 難波委員           プールの改修については、補助金はもらえるのか。
- 事務局             出たとしてもわずか。
- 佐藤委員           もし、学校の授業でぐるるのプールを使うとなると、今のぐるるの施設だと、改修の際にプールサイドを広くするなどの必要がありそうだが、使えなくはない。
- 佐々木委員長       ここでどこまで細かい話をするか。
- 佐藤委員           経費削減するとすればそういうところかなと。
- 佐々木委員長       メニューとして挙げるのはよいのかもしれない。
- 佐藤委員           保健センターを六花へ移転というのは、現実的には難しいのかもしれない。老健自体は町がやっているが、そのベッド数を民間にお願いするとか。使っている方がいるから難し

いとは思いますが、他に施設がない開設当時は町がやる意味はあった。今であれば、保健センターの保健機能を入れて、介護予防などの事業を六花でやるなど、医療と保健を連携させた方がよいのかなと。

事務局 診療所だけだと収入面が赤字気味となり、それを老健でカバーしてという全体的な構図になっている。

難波委員 保健センター全体で考えると、六花に収まらないと思うが、健康指導は公民館で、健診など機材や施設がないと難しい場合は六花でという話であればよいのではないかと。

事務局 六花ができたころから、保健センターと一緒にした方がよいのではないかとという意見があった。

力石委員 保健センターは地盤沈下も激しいから、いずれどうにかしないと。

佐々木委員長 各論をしているときりがないので、振り返りなどから事務局の方で整理してもらおう。どういう系統でどんな複合ができそうか。最終的な計画書の中にメニューを示すだけでも意味はあると思う。今後必要であれば突っ込んでいくし、他のテーマと複合すると次のアイディアに繋がるかもしれない。やはり学校は大きいので、少しは触れても良いのかな。では、「民間のさらなる活用」については、いかがか。

力石委員 宮代町ではアダプト制度というのをやっているが、活発なのか。

事務局 そこまでではない。公園などがあって、地元の人が管理してくれるのであれば支援しますよというような制度。理屈としては、業者が来て草を刈っていくよりも、地域みんなが集まって楽しみながら、コミュニケーションを取りながらという方がよいだろうという。

力石委員 民間とそういった志ある住民の方とコラボした形で地域資源を生かしていくというようなイメージ。各施設が点になっているので、もっと面でストーリー性や回遊性のある形を民間と共同して、例えば農家レストランなど、そういうのを売りにするとか、そういうテーマ性をもたらすのもよいのではないかと。深谷市で、無料体験とサテライトオフィスというのをやった。コロナ禍でこういう要素は結構参入したい事業者がいる。長瀬町でもブランディング支援事業を受託しているが、そこでも相当事業者が手を挙げてきている。宮代であれば、民間事業者を誘致できると思う。古民家的なコンテンツがある。そういうコーディネーターはありだと思ふ。

佐々木委員長 これを具体化するの、やはり民間企業が入ってくる形なのか。

力石委員 指定管理でもありなのかもしれない。その辺も含めてコンサルティングできる。

佐々木委員長 深谷の例はどういう形なのか。



- 力石委員 市の施設ではなく、民間の取組みだったと思う。
- 佐々木委員長 アウトドアも流行っていて、スノーピークのような企業がオフィスと連携させた空間活用のような、そういうのは相当可能性があるのではないかと。宮代の立地の良さであればできるのではないかと。
- 力石委員 長瀬は、地べただけで、上物は事業者という形。
- 佐々木委員長 民間にやってもらえれば、縮小できる。他の意見はいかがか。
- 唐松委員 振り返りに収益化とたくさん記述したが、施設が結構立派なのに充分ポテンシャルを発揮できていないというのが視察した感想。進修館一つをとっても、キッチンにもっと手を入れておしゃれなシェアキッチンにしてしまおうとか、指定管理者も一生懸命やっていると思うが、図書館もオープンブックや移動図書館、本棚のシェアなど、もっとできることがあるのではないかと感じた。場合によっては、新規事業者を積極的に募集していく姿勢を見せるだけでも盛り上がっていくのではないかと感じた。
- 佐々木委員長 新規事業者の募集というと、例えばどういう事業か。
- 唐松委員 月並みだが、郷土資料館の旧〇〇家住宅でカフェが出来れば素敵だなと。公共施設としてよくあるのは、不動産リストを公表して民間提案を募集するとか、何があってもどこを使えるのかというのをオープンにしていくと、逆提案もしやすいと思う。旧〇〇家住宅があるというのを多分みんな知らない。
- 難波委員 竪穴式住居とかは、Wi-Fi さえ飛んでいけばテレワークに最適。
- 唐松委員 今はどこでも何でもシェアスペースにしている。公園の管理事務所をワーキングスペースにしたという自治体もある。  
岡山県の奈義町は、空いているガソリンスタンドに民間発意のお仕事相談センターのような人が常駐するようになり、広がっていった。民間も公共施設も、何が使えるものがあるのか分かるとよい。
- 佐藤委員 新しい村は、魅力アップ事業の中でコンサルが入って作っているというので、そこでどんなことを考えていくのかは、ここにも関わってくると思う。郷土資料館と新しい村が農のみちで繋がっている。西原の森をもっとうまく使わないと勿体ないと思う。先ほどあった隠れ家レストランでもよいし、そういうのがあれば自転車で行き来もできる。今、社協が使っているが、子どもたちがもっと使えるようになってほしい。如何せん、郷土資料館は行きづらい。入館の際に名前を書かされて、いざ入ると電気も暗い。調査や研究を色々やっているのは分かるが、図書館などもっと表立ってリンクができると価値が上がるのかなと。

唐松委員           こんな凄いことやっているんだと思った。やっていることを子どもにも見せたい。勿体ない。

難波委員           東京で料理人をしていた知人が実家がある山梨の市民農園で野菜を作り、隣のコテージに泊まりに来た人が収穫体験をして、それを調理して出すというビジネスをやっている。あくまでも公共施設を使っているが、結構上手なビジネスを考えたと思っていて、そういうのを新しい村でもどうか。収穫体験をして、旧進修館に泊まれるというのをやって、宮代で商売している方が調理してくれるというのがあったらよいと思う。

佐々木委員長      そういうアイデアを実現できる環境が宮代町にあればよい。そういう意味では、新しい村は機能が入り過ぎていて、新規参入がしにくいから、機能を分け、新しい、若い人が今のようなストーリーを展開するとか、参入する機会を作るとよいのではないと思う。

難波委員           今後の検討について、他のところにも関わるが、一期の計画があって、その結果として既に民間に任せているものもある。そういう所が、逆に課題になっているというのがあるのではないかと感じた。管理はバラバラになったので、所有者は宮代町だが責任は負っていない。でも、例えば旧勤労者体育センターは、電球を交換したら電気代を落とせるかもしれないが、バラバラになってしまっているがゆえに、より効率的にできないとか、意思決定がひとつでできないとか。改修するのか、契約をやめるのか、解体するのかなど、これから10年を考えると結構大事な話になるのではないか。一期のときはまだまだ先の話だったものが、二期・三期となってくると、考えなければならない。民活となったとき、民間に使いやすいところを開放していくのか、公共施設として使いやすいところに集めていくのか。使い方や収益性にも関係してくる。統廃合して公共施設は便利になったが、使えない跡地が残るのは相当苦勞する。そこも考えないといけない。

佐々木委員長      最後に「公共施設の収入アップ」についてはいかがか。

                    利用料金を上げればよいのではないかと書いたが、それに限らず、収益アップすれば財政的なプラスになる。予約システムというのは、利用数が上がるということか。

唐松委員           利用率、料金ともに、これで上げられないかということ。サービスが向上するということも含めて。

難波委員           現在はそれぞれの施設で予約を行っているのか。

佐々木委員長      進修館を借りるときは、電話をすると仮予約になり、一週間以内に使用料を払いに行けばよい。電話して予約できるので、インターネットとあまり変わらないという気もするが、ただ、お金を払いに行かなければいけない。空き状況など聞かないと分からないので、とてもアナログ。

事務局            予約システムを使用している自治体を見ると、インターネットと電話のダブルスタンダードでやっている。

佐々木委員長 電話を受けた人が代わりにインターネットに入力して。紙をめくるよりはロスがない。ただ、それを開発するのにお金がかかってしまうのか。

事務局 今はクラウドでそういうサービスがあるので、開発費がかからずにできると思う。

佐藤委員 公共施設の収入アップは、アイデア出しというところかなと思う。ぐるぐるのネーミングライツは難しいとのことだが、四季楽のトイレなど他の施設でも色々できれば。アイデアは出てくるのかなと。施設の利用料は、高齢者が安く設定されている傾向があるが、受益者負担で考えると、ほとんどの利用者は 65 歳以上になってくるので、半額などにするのではなく、子どもたちも払っているのだから、利用料を取ってもよいのではないか。

事務局 今は、高齢者の減免はしていない。

佐藤委員 公共施設を使っている人は、その恩恵を受けるが、全く使っていない人もたくさんいる。泳がない人はプールは必要ないとなってしまう。そこは難しいところ。施設の包括管理をしている市町もある。全部の施設をやるのは難しいが、例えば文化施設だけ清掃などを一括で包括委託管理して行うというのはいかがでしょうか。どれぐらいの効果があるかは分からないが、やっている市町があるということは、何かしらのメリットがあるのだと思う。

佐々木委員長 収入アップというのは、民間企業のアイデアというか、コストカットしていかかに収益を上げるかということ。切磋琢磨している民間企業のアイデアを入れる。

カ石委員 施設そのものの収入アップではないが、新しい村の魅力アップの中で、あの辺で採れた地産品を個人販ふるさと納税の返礼品にするなど、返礼品の魅力をもっと上げて、それを増やしていくのもありかなと。物だけでなく、郷土資料館周辺のワーケーション利用券なども返礼品に加えていく。最近、コト消費のふるさと納税が増えているようなので、面白いと思う。

難波委員 宮代町は、農作物があるはずなのに、返礼品が少ない。

事務局 米と巨峰、梨がメイン。今、野菜も出せるか検討しているところ。

佐々木委員長 何か6次化のものはないのか。

事務局 それは出していない。和菓子屋さんの最中などはあるが、6次化という切り口では出していない。

佐々木委員長 この話も先ほどの機能重複施設の統合の話と同じで、まずはアイデア出し。今出たものを事務局にまとめてもらって、新たなアイデアを加えながら整理し、厚くしていく。一応、今後の検討の方向性について4つ議論したが、それ以外のアイデアは何かあるか。最終的に計画書に落とし込むときの重きをどこに置くかなども考えていかなければならない。コミュニティの場のあり方についてでよいのか。公共施設ではないが、集会所の

話も出ている。

コミュニティの話は盛り上がった。目的型、非目的型、サポート型ぐらいの3つに分けられると思うので、それを整理していく中で、3ビズの話も出たが、民間の活力もきっと絡んでくる。空間の話も出れば機能重複施設の統合についても。

民間力の話は、魅力的。アダプト制度について、知っているのは公園の管理だけだが、他にもあるのか。

事務局 県道を地元の企業や住民が管理していて、立て看板が立っていることもある。

佐々木委員長 カ石委員の資料は、これをもっと前向きに活用していこうというものか。

カ石委員 そうである。意欲ある住民の方も参加して、というようなもの。

佐々木委員長 NPO がやっているような自然保護や宮代町にもあるような野草保全とか、そういう活動をしている団体は既にいる。アダプト制度ではないかもしれないが。

カ石委員 そういう方々がいるなら、もっと連携をしていくイメージ。

佐々木委員長 そういうのもっと積極的に系統立ててやっていく。先ほどの農のみちの話に結び付けていくことがあってもよい。これはかなりボランティア的な感じだが、唐松委員が言ったように稼いでいく、起業に結び付けていくという方向もある。盛り上がる、活性化する一つのきっかけになりそう。無印良品のような大企業がきたが、そこまでの企業でなくてもアウトドアメーカーが関係してくれたりするだけでガラッと変わる。

佐藤委員 今後10年と考えたときに、基本的にはアイデア出しみたいになってしまうだろうが、その中でもコミュニティというのは何かしらしていかななくてはいけない。歩いて行ける各駅ずつぐらいに、いわゆる地区コミュニティみたいなものが宮代にはあるので、それが地区の拠点となる。それが将来的には学校と思っているが、なかなか話が進まないの、その前段階として、どういう形で3つの地区のコミュニティ拠点や活動できる場所を確保するか、防災でもふらっと寄れる場所でも、段階的にどんな機能を作っていくか。

佐々木委員長 いきなり学校は難しいのか。

佐藤委員 難しいのではないかと。コミュニティスクールに指定されれば、校長が招集という形ではなく、校長も一委員としての立場になるので、地区の声も強くなっていく。そうすると、学校の施設や場所をもっと地域に開放するなど。コミュニティスクールとなることで、地区の拠点にはなりうる。いずれはそういう形になってくる。

佐々木委員長 いずれそうなるのであれば、ここで謳って、その方向に向かっていくのがよい気がするが、そうならない可能性もあるのであれば難しい。

佐藤委員 今の宮代で言っているコミュニティスクールはあくまでも補助金の活用のためで、あま

りそこまで深く考えていないように感じる。それを本気でやっていくのかによって、変わってくると思う。現に、東小のコミュニティスクールの代表をしているが、コロナもあり、ほぼ何もしていない。校長とは連絡を取り合っているが、地区の人を巻き込んでという動きは一切ない。おそらく須賀中も似たようなものではないか。

難波委員 二期の会議を行うにあたり、初回に事務局から話があったと思うが、計画が進んでいないのは別として、元々一期は小中学校に集約していくという話だが、そこに何となく違和感があるというところがスタート地点だったかと思う。違和感とはどういう部分なのか。

事務局 学校というのは固くて頑丈な城。他のものは入れないというような風潮が割とあって、一期には建物の考え方が漠然としていた。

佐々木委員長 一期ができてから 10 年経過し、その考え方を基本として考えようとなっているのだから、それをベースにもう一越え、二越えを二期でもよいのではないかと思う。

事務局 コミュニティ機能というのが、地域ごとに学校を拠り所にしてしているということは、この 10 年間誰も否定する人はいない。むしろそうすべきという意見の方が多いような気がする。ただ、なかなか入っていけないというのがある。

佐々木委員長 余裕教室一つを何かにするというモデル事業を各学校一つずつやるぐらいの計画書にしてもよいのではないか。誰かが突破しないと、いずれやるだろうとしていて、30 年経過して何もしていないとなってしまう。笠原小学校には陽だまりサロンという、事例が既にある。そういうのを残りの小学校もやりますと言えば。

カ石委員 割とよいアイデアなのではないか。統廃合よりはよっぽどソフトランディング的な発想である。

事務局 ただ、どういう機能がという話が先にこない。また閉じられた印象で誰も来ない場所を作っても仕方がない。

佐々木委員長 今日のキーワードにも「閉じられたのはよくない」という意見もあった。そこは重要な視点だと思う。

事務局 やはり外から見て閉じられた公共施設が多いという印象。進修館でさえ感じる。スッと入っていこうという建物になっているかという、そうではない。

佐々木委員長 デザイン的には相当工夫されている。何となく入っていけるような。芝生広場からも入りやすい。

難波委員 コミュニティ機能といったとき、目的がない人が立ち寄れる、開いた場所というイメージをしているが、学校はクロズドじゃないとセキュリティが守れない。お金を稼ぐような人が入ってくると、それはそれで困るしというようなところもある。この機能は学校に

持ってこられる機能、そうじゃない機能みたいに、そこは切り分けをして。

事務局 新築するのであれば、建物の構造的に導線を分けてとか。

難波委員 防災のコミュニティとなると学校規模では大きすぎる。町会とか自治会とか。

佐藤委員 細かい町会ごとに防災倉庫があるが、仮に避難するとなるとやはり学校になると思う。多少なりの備蓄はあるから、拠点だと小学校ぐらいのレベルになるのかなと。

事務局 前回の公共施設マネジメントでも、小学校は子どもたちが歩いて通える距離にある。それは高齢者にあてはめてもという考え方はあった。

佐藤委員 例えば、和戸とかでモデル事業を始めたとして、そこに職員を張り付けてその地区コミュニティをやるというイメージはあるのか。

事務局 第5次総合計画に、地区コミュニティセンター事業というのがある。

佐藤委員 それは、学校ではなく地区のどこかでということか。

佐々木委員長 それを学校に置き換えてもよい。

佐藤委員 いずれはそういう形でやるというのもあるだろう。すぐにはできないとなると。今のイメージでは、公民館に職員が行くというものなのか。

事務局 それも含めて検討しているところ。公共施設に限っている発想ではない。大事なのは、建物ではなく機能。

佐々木委員長 話がずれてしまうが、給食は自校式がよいと思っている。有事の時に各拠点で作れたらよい。そうすると防災機能が高められて地域としてのセンター機能というのが複合出来てよい。民間は給食センターのような施設を上手く使ってくれるので、売却でも賃貸でもいけるのではないかと。資産的に、収入の得方としてもよい。

終了予定の時間まであと10分ほど。議題は一通り話した。まとめの方向で意見交換を。

佐藤委員 ワークショップのテーマやあり方について意見交換をしたい。基本的にアイデア出しになると思う。アイデアはいくらでも出てくるだろうが、現実的なものにできないかと。無作為抽出2000人の中から40人程度が参加し、その人たちがあまり町の公共施設と関わりがないのであれば、そういう人たちがよく使っている公共施設やどういう使い方をしていくとか、そういう現実的なところから話を聞いて、その上でこんな施設があったらよいとか、こんな使い方をしたいとかのアイデアに繋がっていったら、より具体的にイメージが湧くと思った。

佐々木委員長 アイデア出しと言って、アイデアが出てくる人は少ないから、自然にそうなるよう

な気がするが、確かに、身近な問題から発想してアイデアを出すという流れはよい。

事務局 当日の聞き方によるのだろう。無作為で集まった人に、普段どういう公共施設を利用しているかというような。

佐藤委員 自分の周囲に聞いてみると、ほぼ利用していない。

カ石委員 そういう人の方が多いのではないかと思う。

佐藤委員 子どもがいたら違うのかもしれないが、知らないと使えないし、予約の仕方さえ知らないかもしれない。そういう 40 人が集まってきたら、大多数の町民がどう利用しているのか、どういうことを考えているのかを把握することが必要かと思った。

佐々木委員長 ワークショップの目的は市民のニーズを知りたいということかと思う。

事務局 こうだから公共施設はよくないと聞くと、マイナスのベクトルでの話になってしまう。こういうのだったもっとよいなということ。表と裏なので、聞き方的にプラスベクトルで聞くということ。

佐々木委員長 今日の最初の話の棚卸しということからすると官民の線引きなく、身近にあるこんなスペースを活用している、例えば、新しくできた無印の 100 円コーヒーが全国売上一番になったらしいが、コーヒーを飲みにあそこの芝生に行くとか、学び舎の空間で勉強するでもよいし、中高生が芝生で寛ぐというのでもよい。

事務局 駅前はとてもよい広場を作っている。あそこの芝生に無印が大きなクッションをいくつか置いたら、中高生やサラリーマン風の人が座っている。この辺の鉄道沿線で駅前にああいう光景があるのはあそこだけ。

佐々木委員長 進修館だって、そういう使い方ができそう。よいきっかけだと思う。公共施設と線引きせずに、どんな空間を使っているかとか欲しいかとか。そうすると自然に棚卸しができるのではないかと思う。

事務局 もしかしたら近所の喫茶店かもしれない。あまり公共という視点にとられない方がよい。

佐々木委員長 ワークショップの話がでたが、他に意見はあるか。

難波委員 将来、統廃合に踏み込むのであれば、今、維持管理費がこれぐらいかかっていて、市民一人当たりではこれぐらいかかっているが、それでもここを残すかを考える。例えば、それだけ払ってでも図書館に価値があると言う人もいるし、それなら必要ないと言う人もいる。

- 佐々木委員長 10年前は、結構そういう話もした。
- 難波委員 したと思う。図書館で借りている本が一冊1600円ぐらい。埼玉県の平均は884円。
- 事務局 図書館は、本の購入がほぼランニングコストとなる。
- 唐松委員 合意形成の段階では、公共施設の一覧や維持管理の費用などのリストがあった方がよい気がするが、今回はどちらかというビジョンづくりなので、ふわんとして質問だけ具体的にしていく方が、前向きな議論に繋がるのではないかと思う。
- 難波委員 今だけでなく、10年後を見据えた計画なので、あなたの10年後こういうのが欲しいというような、あなたのお子さんの10年後をイメージしたらとか。今、小学生の子がいる人は、10年後を見据えると全然違ってくると思う。
- 事務局 折角なので、委員のみなさんには話し合いの中に入れてもらおうと思っている。ファシリテートは役場職員でやって、問を数問。40人参加としたら、5人を8テーブル。全てのテーブルには入れないが、テーブル内の進行をするのではなく、一員として。
- 佐々木委員長 では、ワークショップはそのような感じで。  
間もなく時間だが、今後に向けて、これは話しておいた方がよいというのはあるか。  
先に、次回のスケジュールや内容について事務局から。
- 事務局 ワークショップの前にもう一度会議を開催予定。内容については、本日の議論の内容を事務局で整理し、詰めていく。どこかターゲットを決めて、そこを掘り下げていくという感じでよいか。
- 佐々木委員長 本日の意見交換で、盛り上がったところとそうでないところがあった。機能や収入アップについてはアイディアレベル。メインはコミュニティと民間力だと思う。ここを軸に話していく感じではないか。
- 事務局 民間力といった場合、大きい都市や有名な観光地における民間力と宮代町での民間力は一致しないときがある。民間力というものもある意味資本主義の原理で、サービスがよければ儲かる、儲かりたいからサービスをよくする、サービスがどんどん向上するというよいサイクルだが、必ずしもあてはまらないこともある。
- 佐々木委員長 宮代らしい民間との付き合い方というのがあるはず。
- 難波委員 個人的には公民館を生かしていった方がよいのではないかという意見。規模や使い方の自由さ。ここで誰かに管理人兼カフェという感じ。学校だとそういう使い方は難しい。
- 佐々木委員長 これは公民館に限らず、民間施設や空き家でもできるのではないか。



難波委員            そういう場合、そういう人にみなし公務員的な立場になってもらって支援とか何ができるのかとなれば、そういうモデルで空き家を活用してもよい。

事務局              学校におくというのは先入観でピタッとくるだろうと思っているが、学校においた瞬間、輝いていたものも錆びてしまうということもあるかもしれない。

佐藤委員            以前は公民館に宿直の人がいたと聞いた。ただそれは管理人というだけで、事業はしていなかった。単なる鍵の開け閉めだけ。本当は公民館に人がいて、その人が地区の人を呼んだり集めたり色々コーディネートできれば、とても意味のある場所だと思う。残念ながら今はそうではない。

佐々木委員長      第5次総合計画の事業計画と上手く掛け合わせられるとよい。その辺りも事務局で整理してもらおう。そして次回は新たな再編モデルの構築を。他に何かあるか。

佐藤委員            最後にひとつ。再編して残った場所をどう使うか、公共施設の有効活用となるが、教育委員会の適応指導教室、教育支援センターのような機能は、これからどんどん必要となってくるのではないか。そうになると、場所をどうするかという話になる。今回、社協が抜けた場所がたまたまあったからよいが、無下に使えるものを廃止し整理していくと、何かあったときに対応できなくなってしまうのかなと。

佐々木委員長      施設の温存という考え方もあると思う。  
では、第2回会議を終了とする。

以上